

おそれる・こわがる・おびえる

片岡正人

1. はじめに

国立国語研究所1964は「2.301気分・情緒」の中に、「恐れこわがるおびえるおびやかすおじけりびくつきおのきくふるえあがり臆しすル気圧されル」を分類している。ここでは、この中から「おそれる」「こわがる」「おびえる」をとりあげて分析を行なう。この三語に共通しているのは「恐怖」という感情がかかわっている点である。

2. 辞書の記述

『広辞苑第三版』には

おそれる ①相手の力におされて、心がよわくなる。かなわないと思いこわがる。

②悪いことがおこるのではないかと気づかう。

③うやまって近づかない。おそれ多く思う。恐懼(きょう)する。

こわがる こわいと思う。おそろしく思う。

おびえる こわがって、びくびくする。こわがる。また、こわがって声を立てる。

とあり、他の辞書の記述も、これと同様のものではなかった。

3. 分析

3.1. 構文

恐怖の対象は、「おそれる」「こわがる」ではヲ格に示されるのに対し、「おびえる」では二格に示されるが、以下の分析では同様に扱うことにする。

(1) 熊を おそれる。

(2) 熊を こわがる。

(3) 熊に おびえる。

ただし、「おそれる」「こわがる」のヲ格は感情の向かう対象、「おびえる」の二格は感情の動きの誘因というようなニュアンスの違いが感じられる。また、「おそれる」「こわがる」は各辞書で自動詞とされているが、直接受身文をつくるのが可能である。

(4) 熊は みんなに おそれられている。

(5) 熊は みんなに こわがられている。

(6) *熊は みんなに おびえられている。

これも、対象に向かう感情が心理的働きかけとしてとらえられるからではないかと思われる。

3.2. 感情か動作か

分析に入る前に、接尾辞「—がる」の用法について、国立国語研究所1972の記述を示す。

人間が、形容詞の表わしている内的な気持や状態にあることを外的な態度・言動などに示すことを意味する。(p.23~24)

この記述からすると「こわがる」は恐怖が外的な態度や言動にあらわれていると予想されるが、次の例文に対する直観はこれを支持すると思われる。

(7) 彼は 蛇を おそれる。

(8) 彼は 蛇を こわがる。

(9) 彼は 蛇に おびえる。

(7)は「蛇の出没を心配する」「蛇を聖なるものとして畏敬する」という意味を考えなければ「おそろしいと思う」という感情のみを表している直観がある。これに対し(8)は「こわいと思う」感情とともに、それが外面的に観察できる様子も表す。(9)にいたっては、もっぱら感情が何らかの表情・身体の動きになって現れている。このように三つの例文に対する直観では「おびえる」「こわがる」「おそれる」の順に動作的ということができる。

次に「おそれる」「こわがる」の形容詞形である⁴「おそろしい」「こわい」について考えてみたい。

(10) 熊は おそろしい動物とされている。

(11) ?熊は こわい動物とされている。

上の例のように「~とされている」という文脈によって、熊の客観的的属性を規定する場合には「こわい」は不自然である。これは「こわい」が主観的な場合に用いられるからであろう。これに対し、次のように自分の感情を示す表現である場合には「こわい」の方が適切である。

(12) ?私は 熊が おそろしい。

(13) 私は 熊が こわい。

以上より「おそろしい」は客観的的属性の規定を表すのに対し、「こわい」は主観的感情を表すと考えられる。徳川・宮島1972では上記と同類の例で、森田1977で

は、

「こわいよ！ 助けてくれ」と叫ぶのは自然だが、「恐ろしいよ！」と叫ぶのは不自然……

として「こわい」は「おそろしい」より主観的であると述べている。これも同様のことを指摘したものでろう。

(7)(8)についてもこの傾向があてはまり、前半の分析とも併せて「おそれる」は属性規定に通ずる感情的判断、「こわがる」は主観的感情とその表出、そして「おびえる」は表出をこえた動作と大まかに記述できる。

3.3. 主体

三語とも感情を伴う動詞であるから、主体は感情を有する動物でなければならない。

(14)^(?)その子は 犬を おそれる。

(15) その人は 犬を おそれる。

(14)と(15)を比較すると(14)の方が若干言いつらい。子供は判断力に乏しいという前提があるからであろう。そうすると動物などはさらに言いつらいということになるが、次のようにいうことは可能である。

(16) カエルは ヘビを おそれる。

しかし、これは擬人法と考えばよいであろう。「こわがる」「おびえる」は判断力のあるなし、大人・子供・動物にかかわらず自然に使える。

3.4. 対象・誘因

(17) *お化け屋敷で おそれる。

(18) お化け屋敷で こわがる。

(19) お化け屋敷で おびえる。

(17)は省略でない限りラ格の補語が必要である。つまり「おそれる」は対象が必須補語なのである。これは「おそろしい」が属性規定の意味が強いため、その対象も必須であるのだと考えられる。「こわがる」は具体的な対象がなくても、その場の状況・雰囲気などからこわいと思うことが可能である。これは「こわい」が主体の感情を表すということに平行している。「おびえる」も当然可能である。

次に具体的な補語のあるとき、その補語が「～するのを」あるいは「～されるのを」の形である出来事を表している場合についてみてみたい。この場合、「～する」、「～される」の主体と「おそれる」「こわがる」の主体が一致しているか否か、また「～する」、「～される」の表している出来事の結果、恐怖を生じるか否かによって判定が異なる（「おびえる」は「～するの」あるいは「～されるのに」という形では用いられない

ので一時分析からはずす）。

(1) 主体が一致し恐怖も生じる場合

(20) 彼は 怒られるのを おそれた。

(21) 彼は 怒られるのを こわがった。

(2) 主体が一致し恐怖が生じない場合

(22) 彼は 赤ん坊を起こすのを おそれた。

(23) *彼は 赤ん坊を起こすのを おそれた。

(3) 主体が一致せず恐怖が生じる場合

(24) 私は 歩いている橋のロープが切れるのを おそれた。

(25) *私は 歩いている橋のロープが切れるのを こわがった。

(4) 主体が一致せず恐怖も生じない場合

(26) 彼は 赤ん坊が起きるのを おそれた。

(27) *彼は 赤ん坊が起きるのを こわがった。

(20)～(27)の例文判定により「おそれる」は四例ともに自然だが「こわがる」は(1)の場合に限られることがわかる。これは「おそれる」が恐怖の有無、主体が何であるかによらず「ある出来事の起こることを心配する」という意味をあらわし得るのに対し、「こわがる」は自分が主体となる出来事に対する恐怖にとらわれているときにしか用いられないことを示している。ここにも「こわがる」の主観性をみることができる。

なお、「おびえる」は上で「～するの」「～されるのに」という補語はとらないと述べたが、「～しないかと」「～されないかと」の形にすれば、若干不自然ながらもいえるような場合もあるようである。次の例文を参照されたい。

(28)^(?)彼は 怒られはしないかと おびえた。

(29)^(?)私達は 敵の部隊に見つけられはしないかと おびえた。

ただし、いえるような場合は、やはり、自分が主体となる出来事に恐怖が生じているときで、次のようにいうことは不可である。

(30) *彼は 赤ん坊を起こしはしないかと おびえた。

(31)?? 私は 歩いている橋のロープが切れはしないかと おびえた。

(32) *彼は 赤ん坊が起きはしないかと おびえた。

なお、「～しないかと」「～されないかと」の形にした場合、「おそれる」は(1)(2)(3)ともにやや不自然になり、「こわがる」の(1)もやや不自然になる。

4. まとめ

以上の分析をまとめると次のようになる。

		おそれる	こわがる	おびえる
はたらき		感情的判断	感情の表出	感情変化による動作
主 体		判断力のあるもの	感情を有し、その様子を観察できるもの	
補		具体的な補語が必要	場面、状況、環境など漠然としたものでもよい	
語 出 来 事	「～するのを(に)」 「～されるのを(に)」	恐怖の有無、主体が何であるかにかかわらず可	恐怖が生じ、補語の主体と「こわがる」の主体が一致する場合にのみ可	不可
	「～しないかと」 「～されないかと」	恐怖の有無、主体が何であるかにかかわらずやや不自然	恐怖が生じ、補語の主体と主文の主体が一致する場合にやや不自然、それ以外は不可	

言語経歴：1963年2月 北海道小樽市生 0
 歳～5歳 小樽市 5歳～6歳
 有珠郡 6歳～18歳 札幌市 18
 歳～19歳 東京都目黒区 20歳～
 神奈川県川崎市
 (東京都立大学学生)

とおる・すぎる・ぬける

—移動領域との関わりを中心に—

杉 本 武

1. はじめに

本稿で取り上げる三語は、国立国語研究所1964では、「とおる」が「2.152、通過」, 「すぎる」が「2.152、追い・逃げなど」および「2.16 時間・時刻」, 「ぬける」が「2.153、込み」のように、皆別の項目に分類されている。また、3.でもみるように、これら三語を類義語として分析した研究はなく、直感的にもその類義関係は遠いようである。

しかしながら、「とおる」と近い類義関係にある動詞は見出し難い。また、類義関係の近い動詞の比較においては埋没しがちな特徴が、類義関係の遠い動詞との比較によって明らかになることもある。それは、本稿で取り上げる三語について言えば、本稿で明らかになるように、移動領域の性格、あるいは動作と移動領域との関わり方である。これは、具体的には、次のような文の表現効果の違いに現われる。

- (1) 国境の長いトンネルを とおると 雪国だった。
 - (2) 国境の長いトンネルを すぎると 雪国だった。
 - (3) 国境の長いトンネルを ぬけると 雪国だった。
- (3)は川端康成の『雪国』の冒頭であるが、「ぬける」を「とおる」「すぎる」に替えても自然な文であるが、やはり「ぬける」が最適であろう。

2. 移動動詞について

本稿で取り上げる三語は、いずれも移動格の「ヲ」(cf. 奥津1967)を伴った名詞句(以下単に「ヲ格名詞句」と言う)と共に起る移動動詞である。このヲ格名詞句は、現象的には、「経路」「経由点」「起点」を示す。

- (4) 子供が 庭を 走り回る。(経路)